



はじめに

富士川は、南アルプスの^{のこぎりだけ}鋸岳を水源として駿河湾まで流れる長さ128kmの川で、日本三大急流河川の一つに数えられています。そして日本を代表する急流河川であることから、古くから水害に悩まされてきました。

このため、富士川の上流では戦国武将として有名な武田信玄が甲府盆地を水害から守るために築いたと伝えられている「^{しんげんづつみ}信玄堤」や「^{まんりきばやし}万力林」などの霞堤が、富士川の下流では江戸時代に造られた「^{かりがねづつみ}雁堤」など、古くからの治水技術を多く見ることができます。

ここでは、国内の治水技術の始祖とも言われ、武田信玄が行ったと伝えられる甲府盆地を洪水から守るための総合的な治水対策を紹介します。

甲府盆地と釜無川・御勅使川

富士川の上流は「^{かまなしがわ}釜無川」と呼ばれています。

甲府盆地の西側ではこの釜無川と^{みだいがわ}御勅使川が合流しますが、ここを「竜王の鼻」といい、「甲斐の三大水難所」の一つとなっていました。

「竜王の鼻」は釜無川の扇頂部（扇状地の頂点）に位置します。このため、御勅使川から流れ出る大量の土砂と釜無川の洪水により氾濫が繰り返され、甲府盆地は幾度となく被害を受けてきました。

ちなみに御勅使川とは、天長2年（825）の大量出水で朝廷が勅使を下向させ災害復旧に当たさせたことが名前の由来と伝えられています。このことから、この地域がかなり古くから水害に悩ま

土木紀行

信玄堤

現代に生きる戦国武将の治水技術 山梨県甲斐市

されていたということがわかると思います。

天文11年（1542）に発生した釜無川・御勅使川の大氾濫を契機に、武田信玄が竜王の治水対策に着手し、20年の歳月をかけ信玄堤を完成させました。

この信玄堤は、洪水から盆地を守る堤防と、この堤防を釜無川の激しい洪水の流れから守るために施されたさまざまな仕組みが総合的に機能することで、甲府盆地を洪水から守るようになっていきます。

釜無川・御勅使川の課題

甲府盆地を洪水の氾濫から守るためには、釜無川を安定させる必要があります、そのためには釜無川に合流する御勅使川の安定も必要です。

御勅使川は、きわめてもろい地質を持つ非常に急流な河川ですので、信玄堤の建設を進めるには次のような課題があったものと考えられています。

- (1) 御勅使川の激しい流れを安定させ、そして勢いも弱める（御勅使川の対策）
 - (2) 堤防を守るため、堤防への洪水の勢いを減らす（信玄堤の対策）
 - (3) 治水施設の機能を維持（維持管理の体制）
- これらを、武田信玄は次のように解決していきました。

(1) 御勅使川の対策

信玄堤（図 1 のG）にとって一番問題となるのは、釜無川へ合流してくる御勅使川の激しい流

れを直接受けてしまうことです。そこで、御勅使川の激しい流れを信玄堤のすぐ上流にある「高岩」と呼ばれる自然の崖へぶつけるように御勅使川の流れを変えています。

御勅使川は山から流れてくる大量の土砂により扇状地形となっています。このため、洪水のときには川の流れが安定しないことから、御勅使川の流れを安定させることが「高岩」(図 1のF)へ洪水を向ける第一歩となります。

まず、御勅使川の扇頂部に「石積出し」(図 1のA)を設置することで、洪水のときの御勅使川の位置を安定させました。

さらに、流れが安定した洪水を「将棋頭」(図 1のB, C)で二分して勢いを弱めながら、高岩へ当てるために新しく掘った川(図 1のD)へ導きます。

そして、御勅使川が合流する釜無川には、「^{じゅう}十六石^{ろくいし}」(図 1のE)という巨石を川の中に並べることで釜無川の流れを高岩へ誘導し、御勅使川の流れも高岩へ当てるようにしました。

このようにして、御勅使川の向きを信玄堤から高岩へ変えたのです。

(2) 信玄堤の対策

釜無川の激しい洪水の流れで信玄堤が壊れるのを防ぐため、堤防に直接洪水が当たらないよう「だし」を設けています。

また、信玄堤を水流から守るための護岸は石積みされており、堤防には木や竹が植えられるとともに、棚牛、聖牛、尺木牛などの「水制」が使われました。

こうした工法は、「甲州流河除法」と称され、わが国の治水技術の始祖と称されています。

また、堤防は合流後の川の流れを対岸に向け、万一決壊しても氾濫した水が川へ戻るように「霞堤」となっています。

(3) 維持管理の体制

武田信玄は、完成した信玄堤をしっかりと維持するために、水防林としてけやきや竹を植え、灌漑水路、農地、道路を整備し、近郷の村から領民を移住させ「竜王河原宿」を開きました。

この宿に移住する者には、「棟別役」という緒役や税を免除する代わりに、堤防の維持・管理や水防の役目に当たらせました。このように、堤防などの治水施設を造るだけでなく、この維持管理

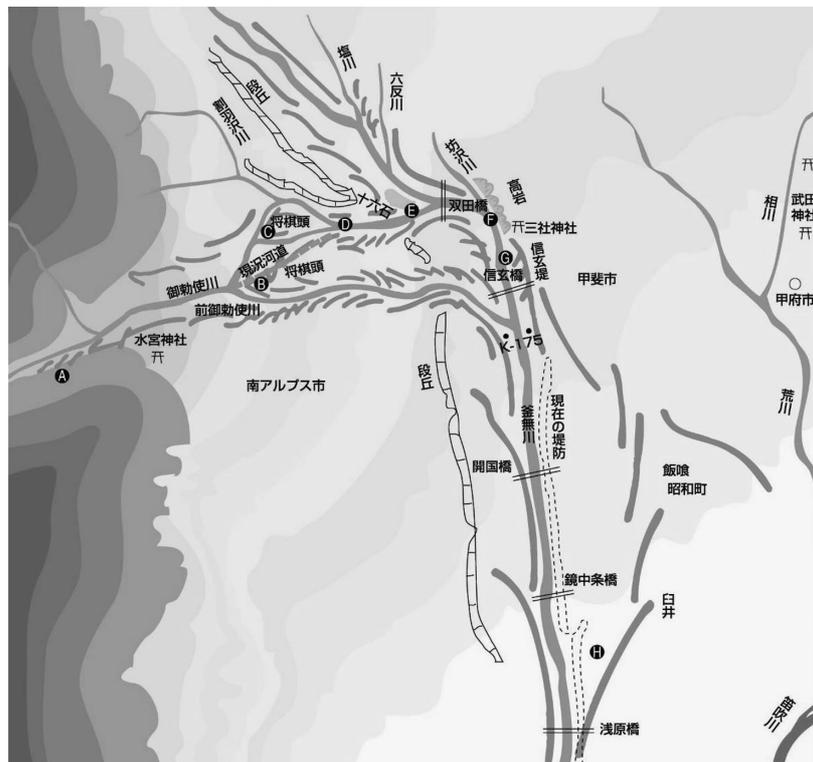


図 1 釜無川と御勅使川の合流地点付近に武田信玄が築いた治水施設(平面図)



写真 1 釜無川上流から「竜王の鼻」を望む



写真 2 現在の信玄堤と聖牛

を行う体制も整えたのです。

そして、一宮町の浅間神社から信玄堤のある三社神社まで御輿を練る「御幸さん」の水防祭りを盛大に行うことで、領民に治水の重要性も周知していきました。

おわりに

現在の信玄堤は、治水の役割を担いつつ歴史的土木遺産として、さらに地域住民の皆さんの憩いの場として、そして観光の場としても利用されています。

このような点が、地域の魅力や個性を創出している、良質な社会資本およびそれと関わりをもつ優れた地域活動を一体の成果として発掘・評価す

る「手づくり郷土賞^{ふるさと}」で評価され、平成19年度の大賞を受賞しました。

また、釜無川にかかる信玄橋から釜無川と信玄堤、背後に御坂山系を前面にした富士山が見られるスポットとして、富士山への良好な眺望を得られる地点を紹介する「関東の富士見百景」にも選定されています。

戦国時代に、治水の工法から維持管理まで総合的に考えられた信玄堤は、現在もさらにその価値を高めながら生き続けています。

関東の富士見百景：<http://www.ktr.mlit.go.jp/chiiki/index00000019.html>